

今回の範囲：操作と基底 (5.55~6.13) ; A(5.55-5.641)、B(6-6.13)

進め方：読み合わせ→レジュメ読み合わせ→全体ディスカッション→課題問題

A. 基底／独我論 (5.55-5.641)

基底とは操作を施される命題のことである。

5.21、5.22 にあるように、諸命題の構造は操作によって示されている。

操作については 6 からまた具体的に述べられるが、操作はアプリアリであるに対して、基底となる命題は経験に依存することを明確にしておく。

[1]P.234 にあるように、「どのような要素命題が真理操作の基底として与えられるかは経験に依存している」。要素命題として挙げられるものを全て経験しているというわけではなく、命題の名が指す対象を私たちは出会ってなければならない(出会ったことのない対象を私たちは思考することはできない)。その意味で経験に依存しており、事実から論理空間を構成する手順なのである。

出会ったことのある対象→すべての事態の構成→論理空間の構成 (1)

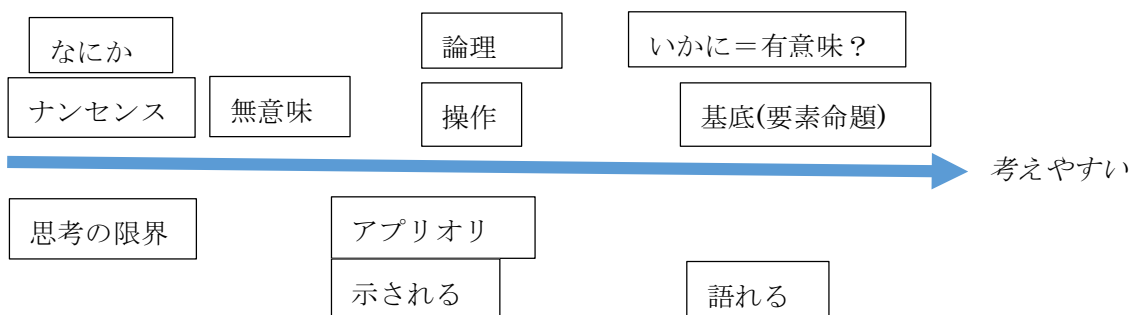
一方で操作がアプリアリであるということは、操作は命題に依存せず存在するということである。たとえば、「否定」という操作はいかなる命題に対しても、機能は変化しない。

5.551 にあるように「およそ論理によって決定される問いは、論理によってすべて決定されなければならない」。世界を観測することで決定される問いについてはそもそも、論理についての話ではなくなっている。

ここで、(1)の図式からも、論理空間が経験に依存していることがうかがえる。このことから、『論考』流の独我論的な立場が展開される。順を追って特出すべき点を取り上げる。

5.55~5.552 より、「バックエンド」なる構造が言及される。論理を理解するためには、経験ではなく「何かがある」ことが必要である。この「何かがある」とは「世界」の存在のことである。世界が存在しなければ、論理は存在しえない。世界が存在しないのにも関わらず、論理が存在する状況は考えられない。

5.5521 で言及される「世界」は「事実の総体」であり、「論理空間」ではない。そして論理は「いかに」よりも前に存在する。



5.554~5.555 までにおいて、規約主義([2]P.260)を考慮している点のように思われる。特定の形式を挙げるのではなく、その形式を可能にさせる体系が重要である。5.557 の二行目、「適用の内にあることを、論理があらかじめ捉えることができない」

5.6 | 私の言語の限界が私の世界の限界を意味する

ここからウィトゲンシュタインの独我論的立場が明かされる。世界の限界とは論理空間に他ならない。

「私の言語の限界が私の論理空間を意味する」ととらえなおすことできる。([2]p.217)。ここでなぜ「私の」をつけたのか。それは私の論理空間の外を思考することはできないからである。このことをもう少しわかりやすく考えると、([2]P.270)の例が使える。すなわち、同じ「論理」を共有しえない人に私の論理を説明することはできない。裏返せばこれは他者の論理空間について知ることができない。

また、存在論は語りえないことも主張されている(5.61)。[2]P.218 にあるように、「世界の限界を超えてはならない」。このことは、図 1 の「なにか」と「論理」の位置よりわかる。

まとめると、私の存在は示されるものだが、他者の存在および論理空間は示すことさえできない。

5.63~5.641 において主体については、『論考』で唯一論じることのできないものとされている。その理由として主体は「思考し表象しない」からである。この部分は次のように解釈できる。すなわち、客体は語ることができる。語ることは対象化(主体との区別)をすることなので主体を論じようとした瞬間に主体が消えてしまうといったことだろうか。(ここは、ウィトゲンシュタインがラッセルのパラドクスを扱ったときの考え方と似ている)。

主体は世界に属さず、世界の限界である(5.632)とあるが、ここは主体が論理空間と一致していることを主張しているのだろう。世界の観察から主体を導くことはできない。これは視野に映るものが自分の眼によって見られているということを通らないのと同様である。

5.62 に「独我論の言わんとすることは正しい」とあるが、独我論とは自他の対比の場面において、自分だけが存在することを主張する立場である。自他の対比の場面には様々なバリエーションがあり、その代表的なものは、すべてを意識への現れにとらえ、他の意識主体は現れないとするものである([1]P.208)。今回の課題でも考えていきたいが、ウィトゲンシュタインのとらえる独我論は徹底すると实在論と一致する(5.64)。

实在論は簡単にいうと、实在を主観と独立してあるものとする立場である。一方で観念論は、自分の意識をベースに世界を展開していく。主観とは独立しているものは存在しない立場である。独我論を徹底すると、主体が自分の世界の限界に押しやられる。主体が論理空間と一致することは、一見観念論に似ているが、主観というものが論理空間に存在しない上、論理空間は経験に依存しているとしても、主観によるものではない。つまり、論理空間内は主観と独立した实在以外に存在しない。

B. 操作と形式／数・論理学 (6-6.13)

[2]P.236 にあるように、ここでは「世界記述」のような形をしているようでしていない命題について扱っている。「世界記述」とは端的に言うと、語られるものである。一方で、数、論理学、数学、自然科学は形式的概念であると思われる(4.126 を参照されたい)。世界記述の命題により行われるのに対し、形式的概念は一般形式により表されるのではないだろうか。

数について：

数は操作の反復である。真理操作だけではなくより広義な操作に含まれると考えられる。規約主義との決定的な違いはここの数の例でわかりやすい。[2]P.276 にあるように、数詞は名ではなく、構成されるものである(一般形式である)。

論理学について：

ウィトゲンシュタインは論理学を「零位法」を行う形式にとらえる。命題同士をつなげてトートロジーを作ること、それぞれの性格を明確にするといった方法としている。(例えば、6.1203 の図を用いて p と q がトートロジーの関係であることを明確にする。これらを明確にすることによって p 、 q 自身の性質も示されることになる。

その意味で、論理学は広義の「同値変形」を行っているにすぎないように感じられる。(6.1202)については「背理法」を行っていることと同じではないだろうか。

課題問題

1. ウィトゲンシュタインの独我論について整理したい。ウィトゲンシュタインの独我論はどのような自他の対比の場面を扱っているのか？時間があれば心理主義、規約主義、一般的な独我論を明らかにしながらまとめる。ウィトゲンシュタインが考える独我論に賛成できるか？彼の独我論から奇妙な例が帰結されないだろうか？(ref. [2]P.260)
2. 論理空間は、要素命題と操作により構成される。野矢氏が表現する「弱いアプリアリ性」、「強いアプリアリ性」は正しい表現なのだろうか？アプリアリ性に階層があるように感じられるが、ウィトゲンシュタインが意図していることと一致しているのだろうか？(ref.[2]P.184)

結局のところ、主体は世界の外にあるので主体が要素命題を作り、操作を行っていることを考えることはできないのではないか(つまり経験しているかどうか確認できない)。その意味では論理空間も操作と同レベルのアプリアリ性ではないだろうか。(「私が要素命題を語る」＝「要素命題が自ら語る」)。そもそも「アプリアリ性」という表現はなんだかおかしいと思う。

3. 6.031|集合論とは数学ではまったく余計である

とはどういう意味なのだろうか？数学も同様に操作であるから、アプリアリである。ゆえに数、数学は偶然的ではなく必然である。このことがどう集合論と結びついているのか。

4. 6.13|論理学は学説ではなく、世界の鏡像である。

これはどういう意味なのか。学説の意味。学説ではない理由とは。形式的概念（数学、論理学、自然科学、哲学）でもそれぞれ担う場所が違ってくるのか。「鏡像」は「トートロジー」を扱っているという点なのだろうか？

機会があれば再度扱いたい範囲：

有限回の操作について(5.32)

5.32|すべての真理関数は、要素命題に対して真理操作を有限回くりかえし適用することによって得られる

今回の独我論を考えてみると、論理空間の対象は有限個に収まるのではないだろうか。少なくとも野矢氏はそう考えているようである([2]P.315)。対象は自分の経験にきっかり一致していなければならないからである。そうすると、有限回の操作についても独我論的視点で踏み込むことができるかもしれない。

要素命題は経験に依存。経験は有限。生は有限。(ref 5.62, [2]P.196)

このように考えていくと、「有限」は決して強い条件ではなく、生に依存するという前提条件によるものだとさえ考えられる。(論理空間は生という条件によって、コンパクトみたいなかんじ？)

要素命題の相互独立性について([2]P.149~163)

『論考』では要素命題が相互独立ととらえたが、それは間違いであり、後期ウィトゲンシュタインの課題となった。それが『論考』に及ぼす影響について考えてみたい。

論理が相互独立なのは明らかである(5.45)。要素命題も相互独立であることが導かれるとしたら、要素命題と論理に「アプリアリ性の強弱」をつけなければならないだろうか。

コメント

ウィトゲンシュタインは考える必要のないことは考えないスタンスのイメージが感じられる。論理学について述べたが、それは代替可能でほぼ意味がないことだとも言っている(。また、「単純なもの」についても述べていない。これは、「以下同様」を実践しているようにも感じられる。(考えたら自明だろう？考えることがナンセンスなのは当たりまえだろう？と煽られているのかもしれない。ランダウのように・・・)。ちなみに対極ともいえる現象学においては「エポケー」(思考を括弧の中に入れる)という行為が存在する。

世界の限界は論理空間であり、世界の事実の総体である。論理空間は明らかに無限の命題が存在する。しかし、野矢氏が述べたように「弱い・アプリアリ性」、「強い・アプリアリ性」があるみたいだ。操作は後者、しかし命題は前者である。

参考資料

[1]『論理哲学論考』岩波

[2]『『論理哲学論考』を読む』野矢茂樹